名著再読

評者・北村行伸 一橋大学経済研究所教授

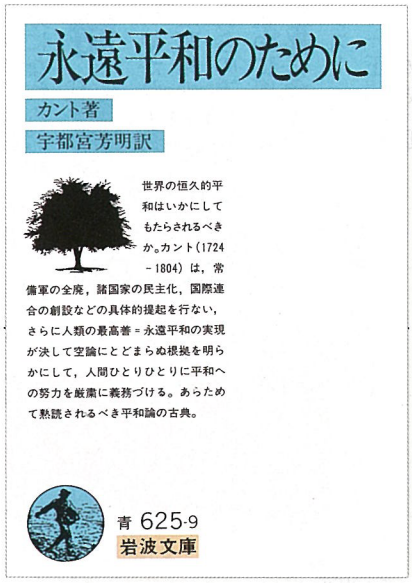
戦争はなぜ繰り返されるのか
今、見直すべきカントの崇高な提案

世界は平和を願いながら戦争を起こし、その戦争に疲弊して平和を誓うという矛盾したプロセスを延々と繰り返している。

この人類史上最も深刻な問題に対して、ドイツ観念論哲学の創始者であり、すでに主著『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』を書き終えていたカントが、一七九五年、七一歳の高齢に鞭打って著したのが本書である。実際、この一〇〇ページに満たない書物は、カント哲学の全要素を投入して答えを与えようとしたもので、現在でも最も具体的であり、精神的に高いレベルにある平和推進案であり、そのきわめてモダンなメッセージ性には驚嘆せずにはいられない。

カントは具体的にどのような条件が整えば平和が達成され、それが維持されると考えたのだろうか。カントは国家間の永遠平和のための予備条項を六つ挙げている。それらは、将来の戦争の種を密かに留保して締結された平和条約は、決して平和条約と見なされてはならないということ、独立国家への不可侵、常備軍の全廃、戦時財政の手段としての安易な国債発行の禁止、将来の再建を見通さない殲滅戦争の禁止などである。

これらの条件が満たされるとしたうえで、国家間の永遠平和を確定する三条項を挙げている。それらは、各国家における政治体制は、民主主義に基づく共和制でなければならず、国際法およびその執行機関は、自由な諸国家の連合、すなわち国際連合に基礎を置くべきであること、世界市民法は、普遍的な友好をもたらす諸条件に制限されなければならないということである。



現実的な永遠平和の条件

さらにカントは、これらの条件は経済的交易を通して、自然に保証されるようになるだろうという、現在でいえば、グローバリゼーションが国際的な武力紛争を起こしにくくするという議論に近い議論を展開する。

もちろん、カントのこのような崇高なる提案にもかかわらず、その後、悲惨な戦争をいくたびも経験してきた。しかし、このことはカントの提案の非現実性を証明するものではない。現に、民主主義、国際連合中心の意思決定、化学兵器、原子爆弾などの殲滅的兵器の使用禁止などについては合意が得られている。

ここではむしろ、丸山真男が述べたように「戦争は一人、せいぜい少数の人間がボタン一つ押すことで一瞬にして起こせる。平和は無数の人間の辛抱強い努力なしには建設できない。このことこそ、平和の道徳的優越性がある」という意識に常に立ち返り、カントの永遠平和の条件を達成する努力を続けなければならないと考えるべきであろう。

本書は時を経てますます輝きを増し、その先見性に畏敬の念をおかずにはおれない典型的な古典である。

1985 年刊

永遠平和のために
イマヌエル・カント著
宇都宮芳明訳
岩波文庫

◎竹森俊平、野口 旭、若田部昌澄、小池聖一、土居丈朗、北村行伸、岩田規久男、永木 暢、井上義朗各氏の書評を順に掲載します。